
蝶のように

水瀬律那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶のように

【Nコード】

N6638C

【作者名】

水瀬律那

【あらすじ】

静かな森の奥にある、大きな邸。小鳥は囁き、邸に朝が来たことを告げた。

静かな森の奥にある湖。

日の光が反射して、水面が輝いている。

湖のほとりにいる小鳥は

ささやくように鳴き、朝が来たことを告げた。

その湖の隣。そこに、大きな邸があった。

西洋風の建物で、邸から少し離れたところにある

門柱には「ミシエル」と書いてあった。

邸の二階にある部屋の、一つ。

その部屋のドアには、リラーシユと英語で書いてあった。

そこに向かう、一人の男。

黒色の燕尾服を着ている。

右手には銀色のトレイ、その上には

湯気が立った紅茶がのっていた。

男は部屋の前につくと、左手でドアをノックする。

乾いた音がした。

そして、ドアノブに手をかけ

ドアを開け、部屋の中へと入る。

部屋は広く、ほとんどの物がピンク色だった。

その隅にある、大きなベッド。

上から白いレースのカーテンがかかっている。

男はベッドに近づくと、その横にある

小さなテーブルにトレイを置いた。

そして声をかける。

「お嬢様。起きて下さい」

レースのカーテンの向こうで、何かが動く気配があった。

しばらくした後、ベッドに寝ている人物が

起き上がる様子が、カーテン越しに見られた。

そして、カーテンが開けられる。
男はにっこりと微笑む。

「おはようございます。リラお嬢様」

「・・・おはようセファル」

ベッドに座っている少女は、眠そうに目を擦って言った。

「今日の紅茶はアールグレイにしてみました」

「そう。いい香りね」

少女は小さなあくびを一つすると
ベッドから降りた。

「それでは、お着替えが終わったらいつものようにダイニングルーム食堂へ」

そして、指をパチンとならす。

すると男の後ろから、メイド達が4人ほど

現れ、部屋の中へ入っていった。

男は右手を左胸にあて、左腕を後ろに回して
軽く頭を下げた。

そして、静かにドアを開けると

部屋から出て行った。

ミシエル家。世界でも有名なデザート専門店。

ミシエル家の主人、マルスは

妻と二人で、数年前にデザート専門店を創り上げた。

最初は小ぢんまりとした店だったが

日に日に人気が出て、店の前には行列が出来るようになり
あっという間にミシエルのデザートは

ブランド物になり、店舗を増やしていった。

マルスの元には、たくさんの金が入ってきた。

そして、マルスは「ミシエル」の社長となった。

その娘、リラーシュ。

年は十五歳くらいで、髪の色は金髪。

毛先にはゆるいカールがかかり

顔は小さく、まさに人形のようなだった。

周りには、「リラ」と呼ばれている。

本人もそれを気に入っていて

たまたま手紙の返事に、「Dear リラ」と書くこともあった。

「リラお嬢様は、今日も綺麗で美しいですわ」

「本当、羨ましい限りでございます」

メイド達は、笑顔でリラに話しかける。

「ありがとう」

リラは笑顔で言うと、鏡で自分の姿を

確認してから、部屋から出て行った。

リラの部屋から出た男は、廊下の花に水をあげていた。

セファルと言う名のこの男は

ミシエル家の執事だった。

リラが小さい頃から、周りの世話をしているので

リラにも気に入られている。

少々くせつ毛気味のその髪型が、窓から入った

そよ風に揺られる。

セファルは風を気持ちよく感じながら

水遣りを終えた。

そろそろリラお嬢様が、お着替えを終わって

食堂へ向かっている途中だろうか。

そんなことを考えながら、セファルは

食堂へと向かって歩いていった。

ミシエル家の食堂。ダイニングルーム

そこは、高級感漂っており

部屋の隅には、骨董品かと思われる置物がいくつも飾られている。

長いテーブルの横。離れたところにステージがあった。

コンサートホールと比べたら小さいがそれでも立派な舞台だった。

そこで演奏する、オーケストラ団。

指揮者が優雅に、指揮棒を振っている。

食堂に響く、優しい音色。

その音に身を委ねながら

ミシエル家の主人であるマルスは

コックが作った朝ごはんを食べていた。

セファルは、マルスの後ろの

少し離れたところに立っていた。

そこに、リラがやってくる。

「おお。やっと来たか」

マルスはリラに気付くと、顔を上げて笑顔を見せた。

「おはようございます。お父様」

ドレスの裾を少し上げ、リラは御辞儀をした。

そして、席につく。

するとすぐにメイドがやってきて

リラにナプキンをかけていった。

リラの前に、皿が何枚も並ぶ。

「ありがとう」

微笑みながら小さく言うと

リラはナイフとフォークを手にした。

セファルは、その様子を見守っていた。

嫌いなものがあると、露骨に顔を

顰めながら食べるリラ。

それは何か微笑ましく、セファルは思わず
笑顔になった。

「ところで」

料理を食べ終わったマルスが、口を開く。

「今日は家庭教師が来る日だ」

その言葉を聞き、リラは嫌な顔をする。

「ちゃんと勉強するようにな」

マルスはそれだけ言って立ち上がると

執事に何か言って、食堂から出て行った。

その後姿に、リラは舌を出した。

「お、お嬢様」

傍にいたメイドが、慌てて注意をする。

だって、と反論するリラの姿を見て

セファルは小さく笑った。

それを見て、リラはむっとする。

「何よ、セファル」

「何でもございません」

平和だな、とセファルは思った。

やがて朝食を食べ終わったリラは

立ち上がり、セファルに言った。

「セファル。一緒に来て」

「はい」

一礼して、セファルはリラの後についていく。

しばらく歩いたところで、セファルはあることに気がついた。

てつきりリラの部屋に行くのかと思ったら
この先は、中庭だ。

「・・・お嬢様。どこへ行かれるんでしょうか？」

「どこへって、いつものところよ」

ああ。セファルはすぐに頭のなかに

リラの行った場所を思い浮かべ、ため息をついた。

「しかし、これから家庭教師が・・・」

「いいのよそんなの。さ、行きましょ」

リラは笑い、また歩き始めた。

セファルはまた叱られる、と思いながら
ただ、リラの後を着いて行くだけだった。

しばらく歩いて、着いたところ。

そこは、中庭の抜け道を通って

森の中を歩くと着く場所だった。

「いつ見ても綺麗ね」

リラはその光景を見て、うっとりとする。

そこは、森の開けた場所にある花畑だった。

たくさんの花が咲いていて、季節によって

様々な表情を見せていた。

「ほら、セファル！蝶がいるわ」

リラは笑って、蝶のもとに駆け寄る。

セファルは木陰に座り、その様子を見る。

蝶はリラが近寄ると、ひらひらと空中を彷徨う。

そして、リラの肩に止まった。

それを見て、リラはセファルを見て微笑む。

セファルもまた、リラにつられて微笑んだ。

しかし、すぐに蝶はどこかに行ってしまう。

リラは蝶が飛んでいった方向を見ながら

残念そうな顔をした。
それを見て、セファルはまた
微笑んでしまった。

こうしてみると、お嬢様は蝶のようだ。
セファルは一人、そんなことを考えていた。
美しく、可憐で、人を引き付ける魅力を持っている。
そのくせ、寄ってきたものには
ふらふらと近づかない。
自分が気に入った者だけ、自分から近づく。
振り回されたり、甘えられたり。
ころころと表情を変えるお嬢様は
本当に、可憐で愛しい。
いつまでも、この時間が続いたらいいのに。
セファルは一人微笑んだ。
顔を上げ、リラのほうを見る。
すると、笑顔で手招きをしていた。
セファルは微笑み立ち上がり
リラの元へと歩いていった。

この時間が、いつまでも続きますように。
リラと二人で笑いあう中
セファルは心の中で、そう願った。

2 (後書き)

とにかくほのぼのとした、お嬢様に恋する
執事物が書きたかった(藁)

「無能な」の息抜きに書いたものですが・・・
結構時間がかかってしまった；

読んでくれてありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6638c/>

蝶のように

2010年10月22日00時23分発行